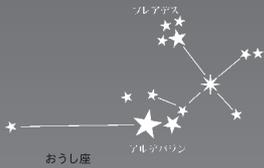


ポラリスを仰ぐ北の大地から



医療費の社会的認識

三笠市医師会 会長 川崎 君王

現在医療費は社会保障会計と自己負担で賄われている。その社会保障予算が人口の少子高齢化に伴い、年々増加して、その増大が社会問題となってきたことは周知のことである。若年人口が増え、産業が勃興する時は社会保障費より産業を含めた社会インフラ整備予算が大きいことは1960年代でのわが国の国家予算をみると明らかである。製造業からサービス産業へ国の産業構造が変化して、成熟してくると、人口の高齢化と歩調を合わせ社会保障費が増えてくることはわが国のみならず先進国に共通した構造変化と言える。

ではその社会保障の充実とは1929年の世界恐慌が象徴する資本主義の短所が国民生活、特に福祉に害を及ぼす負の側面から、同時代には存在したソビエトロシアとの体制競争において国民全体の福祉の充実にどちらが実現できるか、先進国が社会主義的要素を積極的に吸収して福祉国家の充実を図ることをしてきたと松戸清裕は著書「ソ連という実験」の中で述べている。さらにソビエトロシアが存在していた時期にわが国は高度な福祉国家として誰もが飢えることがなく、すべての子どもが学校へ行き、すべての病人が治療を受け、失業は存在しない状況を成し得ていないことから、ソビエトロシアが存在しない現在福祉国家機能が縮小する選択は選びやすいと結論している。

医療は福祉か産業かとの問いもよく耳にすることではあるが、医療の産業化は創薬に代表される医療技術等の輸出産業に成り得ることでしょうか。産業は市場から資金を得て起業・発展することから、投機マネーを含めた投資による資金調達と言え換えることも可能です。医療が福祉であることは医療の前提である。このことが過去の事柄にならないように。



キックの鬼

美唄市医師会 会長 井門 明

昔キックの鬼と呼ばれた格闘家があった。50代以上の方はご存知だと思うが、1966年から1976年まで活躍したキックボクサー沢村忠選手である。日本キックボクシング協会東洋ミドル級とライト級の王座を獲得し、計34回にわたり防衛した。真空飛び膝蹴りを武器にKOを重ね、ファンを熱狂させた。「キックの鬼」というテレビアニメも放映され、子ども達のヒーローでもあった。

「巨人の星」を観て子ども達が巨人ファン、野球ファンになったように、沢村忠選手の試合やテレビアニメを観てキックボクシングに憧れた子どもも多くいたものと思われる。沢村選手の引退後は、キックボクシングは下火になり、テレビで観戦する機会は少なくなったが、その後1990年代にK-1グランプリとして復活し、アンディ・フグやピーター・アーツら有力選手が人気を博した。

北海道では生でキックボクシングの試合を観戦できる機会も少ないが、10年ほど前からBOUTという格闘技イベントが年に数回札幌を中心に開催されている。チケットはなかなか手に入り難くなっているが、毎回最前列で熱狂している中年男性がいれば私である。

翻って、医師会活動も常にファイティングポーズを取って格闘していると言ってもいいのではないだろうか。闘う第一義的な目的は日本の医療制度を守る、ひいては国民の健康を守るためであろう。地域医療のこれ以上の崩壊を防ぐために、時にはキックを繰り出すことも必要になるかもしれない。さしずめ、敵は財務省と日本の市場を虎視眈々と狙うアメリカ経済界であろうか。トランプ大統領がレフェリーの制止を聞かずに反則技を仕掛けてくる可能性もある。沢村忠選手のように必殺技を手に入れて、KO勝ちできる日が来ることを熱望してやまない。